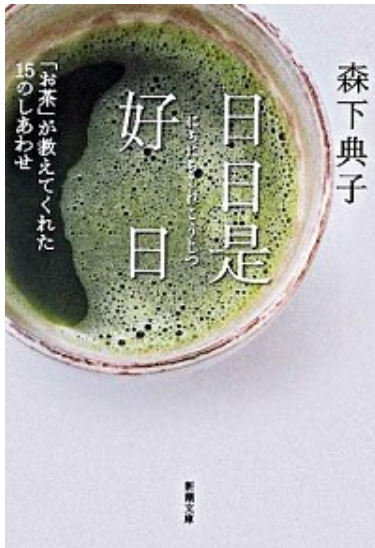


天草市立図書館スタッフによるオススメ本紹介 ♪ぜんぶ図書館で読めるよ♪2018秋



『日日是好日～「お茶」が教えてくれた15のしあわせ～』

森下 典子／著（新潮社 2002年1月出版）

私が今年読んだ本の中で一番心にしみた本が『日日是好日』です。今年10月に映画も公開され、樹木希林さんが出演されていることもあり、タイトルを耳にした人もいるのではないのでしょうか。

「茶道なんて堅苦しい…」とお思いの方、ご安心を！こちらは茶道の指南書ではございませんので。

著者は茶道を習う中で、季節を感じ、お点前の先生からおもてなしの心を学んでゆきます。大学生の頃は気づかなかったことに、30代、40代と歳を重ねることで気づけるようになるのも、お茶と向き合うことで感じられる変化だと思いました。

この本の中にはたくさんの気づきが書かれていて、日常も心のありようで素敵に輝きだすことに気づかされました。

言葉で説明するのは難しいので、ぜひ手に取って、心で読んでほしいです。

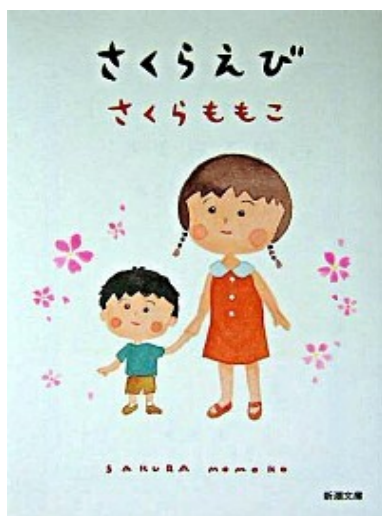
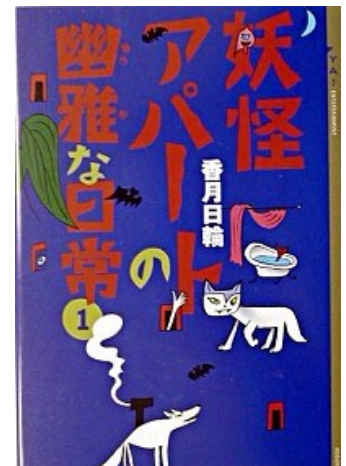
お茶のように心にじんわり染み入る何かがある本だと思います。

『妖怪アパートの幽雅な日常』全10巻

香月 日輪／著（講談社 2003年～2013年出版）

最近、夜も暗くなるのが早くなり、寒くなってきました。家の中で休日を過ごされる方も多いと思います。そんな方におすすめしたいシリーズが、『妖怪アパートの幽雅な日常』です。YA作品として人気が高い本作ですが、大人の方にも楽しめる要素がいっぱい！

高校入学と同時に奇妙なアパートで一人暮らしをすることになった主人公の夕土。そこには、ちょっと変わった住人や、なんと妖怪たちが住んでいました。彼らと、笑って泣いて、おいしいご飯を食べて成長していく夕土の日常を描いた物語です。手首だけの幽霊・るり子さんがつくご飯…食べてみたくなりますよ！



『さくらえび』

さくら ももこ／絵と文（新潮社 2002年出版）

父・ヒロシや息子のめろんくんが大活躍(暴走?)する愉快的なエピソードが盛りだくさんのエッセイです。ありふれた日常をこんなにも生々しいほど正直に、面白く描けるなんて本当にすごい！ちょっと思いつめているとき、疲れたとき、何も考えたくないとき、とても気軽に読めて、本を読むことがますます大好きになる楽しい1冊です。

教訓とか学びとか、そういう堅苦しいものは抜きにして、ただただ笑いたい方へおすすめです。

日常の何でもないことを、楽しく捉えることができるのってとっても素敵ですよ！

『昆虫戯画びっくり雑学事典』

丸山 宗利／文 じゅえき太郎／漫画
(大泉書店 2018年5月出版)

えっ！とおどろき、クスッと笑える。おなじみのあの昆虫から、身近な知られざる昆虫まで、意外と知らない昆虫たちの、不思議で驚きの雑学がたっぷり。

かわいくてどこかシュールなイラストで読みやすいので、昆虫が苦手なひとにもおすすめ！昆虫がなんだかかわいく思えてきちゃう一冊です。

「かんぺきな人間がいないように、かんぺきな虫もない。どこかぬけてるぐらいがちょうどいいのだ。」



『夜市』

恒川 光太郎／著 (角川書店 2005年出版)

恒川光太郎さんの本は、異世界に連れて行ってくれる。

何でも売っている不思議な市場「夜市」。幼いころ夜市に迷い込んだ祐司は、弟と引き換えに「野球選手の才能」をその「夜市」で買った。自分の弟を売ったことに罪悪感を抱いていた祐司が、弟を買い戻すために夜市を再び訪れる…。予想できない結末が待っています。

読んでしまった後で知ったのですが、この『夜市』は第12回日本ホラー小説大賞を受賞したデビュー作だったそうです。それを知って、ジャンルが“ホラー”だったことに驚きました。

異世界は好きですが、ホラーは全くダメ！ホラー小説のくくりに入っていると知っていたら絶対読まなかったことでしょう。ホラー小説とは？の定義のくくりを考える。

この秋、『異世界』をどうぞ。



『妻が願った最期の「七日間」』

宮本 英司／著 (サンマーク出版 2018年出版)

読んでいくうちに、こみあげてくるものを抑えられなくなりました。特に、詩「七日間」の中の七日目の詩が何とも言えません。

「七日目にはあなたと二人きり静かに部屋で過ごしませよ
大塚博堂のCDかけてふたりの長いお話しませよ
神様お願い 七日間が終わったら私はあなたに手を執られながら
静かに静かに時の来るのを待つわ
静かに静かに時の来るのを待つわ」

がんを告知された奥さんが最後に書いた「七日間のお願い」です。

自分のつれあいとのこれまでの過ごし方について考えてしまいました。心が静かになる一冊です。





『さよなら、ムッシュ』

片岡 翔／著（小学館 2017年出版）

小さな出版社で校正の仕事をしている森星太郎（27歳、一人暮らし）には、とある秘密があった。幼いころ他界した、児童文学作家の母が作ってくれたぬいぐるみと暮らしていること。そのぬいぐるみは、しゃべること。

二十年前、母が亡くなった日にしゃべりだした、そのコアラのぬいぐるみと、無二の親友になり、日々を楽しく過ごしてきた星太郎だったが、ある日の工作中、しゃっくりが止まらなくなってしまう。そのことで、否応なしに生活を変えることになりー。

星太郎と、ぬいぐるみ・ムッシュが過ごしたかけがえのない時間がきらめき、せつなく胸に迫る作品です。表紙の絵は、漫画家・松本大洋によるもの。松本作品や、有川浩の『旅猫リポート』、ディズニー映画の

『トイ・ストーリー3』がお好きな方、ぜひ、お読みください。

『七〇歳年下の君たちへ ころろが挫けそうになった日に』

五木 寛之／著（新潮社 2018年出版）

70歳年下の高校生に、ベテラン作家がこれまでの体験から得たことを語り、質問に答える形式で書かれた本である。

10代半ばの悩み多き少年たちと共振した奇跡の講義録とか、「ころろがくじけそうになった時困難を乗り越え生き抜いて行く力になる」と帯タイトルに記されているが、それ以上で大変読み応えがある。

講話も質問内容も幅広くて深まりがあり、学生から大人まで沢山のことを学び、人生の奥深さを考えさせられる本ではなかろうか。



『白のショートショート』

山口 タオ／著（講談社 2018年出版）

就寝まえは、

- ① ほのぼのしたものを読んで眠りにつきたい。
 - ② つづきが気にならなくて、すぐ読み終えるものを読みたい。
- という気分で、この本を読んでみた。

「ショートショート的神様」といえば、星新一さん！

山口タオさんは、この本に収録されている「ふられ薬」で「星新一ショートショートコンテスト」最優秀作を受賞している。

期待どおりさらっと読める。見開き1ページで読み終えるものもあった。ほのぼのする…。と、ここまでは良かった。じわじわ余韻が後からくる。「そうだったのか！」と、しばらくしてから、驚いてしまう。次の作品が気になる。時には、自分もお話作れるかも～？と妄想にふける。

同時刊行されたちよっぴり怖い『黒のショートショート』も読んでみたくなる（読んだ）。それから、それから、星新一さんの読んでいない作品を読みたくなる。

こうして、私の期待を裏切る読書のループは夜な夜なつづくのであった。

『潮鳴り』

葉室 麟／著 （祥伝社 2013年出版）

かつて藩士だった伊吹權蔵は失脚し海辺の漁師小屋に住んでいた。周囲に檻樓蔵（ぼろぞう）と呼ばれるまで荒んだ日々を送っていたが、藩の不正により死に追いやられた弟の死をきっかけにもう一度立ち上がる。

一度地に落ちた權蔵を誰一人として信用しなかったが、權蔵の一途な思いにより次第に心動かされていく。



『孟嘗君 (もうしょうくん)』1～5巻 宮城谷 昌光／著 （講談社 1995年出版～）

私は、時々忘れたところに、宮城谷昌光作品を読むことにしています。はるか数千年前の、中国歴史小説。どの作品を何回見ても、感動を覚えます。

人の有様は、数千年経った現在でも変わることはないと思います。

良書は繰り返し読むことをおすすめします。